

## 美術の窓(33)

## 宋代絵画と日本

大和文華館館長 吉川逸治

前回の宋代絵画についての感想で、宇宙像としての特徴があることを述べました。元来、宇宙像としての芸術は、天をめざして地上にうち建てられる聖的なモニュメントとしての建築が荷うべきところですが、絵画が荷う宇宙像とは、画家、鑑賞者の「個人的視覚」の把らえる観照の対象としての画像で、その鑑賞のうちに深い宇宙論的思考に導かれます。

私どもの眼は小さいながら大自然の景を一点に集めて把えます。この形像を画面に奥行ある遠近関係の空間を設定し、精妙に調整された明暗関係、光と陰の対照関係のうちに表現します。描出された外界の対象は丹誠して現実の姿を写し、微細な点まで疎略にしない写実主義に服します。宇宙像であり、あるいはその構成部分であるから、信念をもって写実に徹するので、リアリズムはこの絵画の基本的な性格です。

これに対し佛教図像などの宗教図像では、尊像は彫刻から取入れた立体的人体像であり、曼荼羅などの教理説明図は、これらを幾何学的図式に納めた平面図形をとりまします。これらは、隋唐時代の佛教絵画で古典的な完成をとげます。

宋代の佛画は上に述べた「個人的視覚」に凝集される宇宙像という性格をもって、これまでの古典的図像に改変を加えます。画家は、鮮やかな色彩を精妙な明暗調で捉え、光と陰の調整された遠近関係の空間のうちに聖画像を融溶し、「個人視覚」の参加を強調します。

特別展で展示された宋代佛画は仁和寺の孔雀明王像もすでにかかる性格を示し、永保寺の千手観音像、知恩院の阿彌陀浄土図などによく窺われます。

日本では、建長寺の千手観音像がよく宋風を伝えますが、降って、雪村の観音見宝塔図や、殊に彼の太田の正宗寺の楊柳観音像が、手前に小さく善財童子、奥の山間に瀑を懸げ、中央の薄暗い岩上に楊柳観音を光に照し出して描き、宋代佛画をよく消化しています。室町時代には、すでに牧谿の観音猿鶴三幅対の大作が伝はっているので、新しい佛画の表現方式も理解されるようになったでしょう。ここで注目されるのは、薄暗いバックの空間に画像を納めて、光の照射のうちに現れ出させる方法で、すでに近世絵画的なところを示しています。

宋代絵画の特色は山水画と花鳥画に発揮されます。前者の宇宙論的構想に対して、後者の宇宙の微細な分子についての親密な接触は対照的ですが、いずれにおいても宇宙とか自然とかに関して畏敬の念をもって処す態度の基本には変わりありません。花鳥画の緻密な分析的態度は山水画より近代科学の先駆的活動を思わせますし、これに対して簡潔な破墨の山水画は、自然の山水に対処する画人の主観を露呈するところから、近代的主観主義の先駆的現象と言はれます。

宋画は、鋭い色彩感覚と明暗調の整備による空間表現と光の描出

とによって、すでに近世的ともいえる特色を発揮します。

雪村は東国で渡来した宋画を広く学んで、自己の画風を作り上げるのに役立てたらしく、緻密な彩色画の次に水墨画も学び、略画風の水墨画の外に、本格的に濃淡の調子の変化を巧みに用いた水墨画に特色を発揮します。特別展に展示された陳容の変幻する黒雲のなかの龍の墨画の如きは彼のあこがれたところでしょう。かの呂洞賓が龍頭を踏まえて、手にした小壺から次々に小龍を暗雲漂う天空に跳り出させ、大龍と化して雲間に隠見する。この空間のなかに時間を導入する動的構想も宋画の世界から学んだところでしょう。

溯って、わが室町時代の画家たちは、すでに多くの彩色や水墨の宋画が伝来していたのに、「水色巒光」や「谿陰小築」のような詩画軸が示す如く、宋文化の心には触れていても、その造形化は難行していたように想われます。はじめて当時の中国画風を理解して、自己の芸術に仕上げたのは、やはり雪舟ではないかと思えます。

巨匠が応仁元年(1467)から足掛け3年滞明中の制作といわれる日本禅画雪舟の替ある東京国立博物館の春夏秋冬の四幅対の大作は、今日知られる雪舟の最も早い作品ですが、この須彌山の如く大山嶽を露呈するところから、彼が好んで描く懸崖、洞窟、機道、樹木、水辺と州浜、仏寺樓閣など詳しく描きこみ、彼の画風の大成したことを示します(東海大学の村野浩教



国宝 孔雀明王図 仁和寺蔵

授は天童山の四辺の景と推定してあります)。これを横に長く展開して「山水長巻」、「山水小巻」を作り、洞窟を奥に達磨をまんやかに、手慧可の半身を示し、自力のドラマを語る「慧可断臂図」。晩年の「天橋立図」では精妙な濃淡の墨色で雲霧と連山に囲まれた勝景を俯瞰する遠近関係のうちに納めて、円熟しきった巨匠の画境を示します。

雪舟は、画中の主たるテーマを中景に描き、近くは縁取りの形にとどめます。慧可を半身像で現わし、天橋立では、手前は二次的な連山を描き取りまします。また、雪舟筆とされる花鳥屏風は、樹石平遠山水から樹石を借りて、松の大樹を構図の根幹とし、それに梅と竹を寄せ、水辺の州浜に瑞鳥の鶴と白鷺を配して作りあげます。以後、桃山—江戸時代を通じて盛んに描かれる障壁面の裝飾画風の源を開いたものと思えます。宋画の芸術を日本化した雪舟の努力を反映する一端ではないでしょうか。

季刊 美のたより No.89

平成元年 11月 17日

発行 大和文華館